

あなたは問われてなどいないと言い切りたいのだが、しかし、あなたは問われていると言いたくもなる

橘英希

はじめに

「吉田寮は稀有な場所である。」私は、ここに関わってきた一人としてこう言うわけであるが、その立ち位置の特権性、秘匿性、閉鎖性には¹しばらくは眼をつぶってもらいたい。ただし、若年寄り、古年寄りどもが幅を利かせて何と言おうと、冒頭の文句はあなた²にとって揺るぎのなく確かなものであるし、本当ならばそこに慣れきってしまった者こそがこの文句の内実を詳らかにし、それを肯定し断固として保持し抜くべきなのではある。あぐらをかいてはこの場所を満喫し、平凡さに安寧するのではなく、その特異点を引き延ばしにかからねばならない。なにはともあれ、「吉田寮は稀有な場所である」という、あなたにとっては未だ確かならざるものを、確かなこととしてまずは引き受けてもらいたい。

ここで私は早くも、話を急旋回させる。前線に立つ者たれば、じりじりと戦局の行方を見守ることに終始してはいけない。急旋回は前線たるものの使命である。この急旋回、あなたにとっては突飛なものであろうが、振り切られずに付いてきて欲しい。

私はここで、急旋回、ドゥルーズ³を引く。この大哲学者の語る言葉を、青臭い若造が、ミーハーな仕方で、よくもぬげぬげと引いてくれるな、との誹りが各所から正しくも噴出していることだろうが、私はそんな反応に対して顔を赤らめるしかない。顔を赤らめた上で、それを恥じらいの赤でなく、血気の赤として粉飾し、若造らしく立ち居振る舞うことでこの気恥ずかしさをどうにか脇に追いやることにする。そうだ、私は引いてやるのだ、ミーハーとして、臆面もなく、勝手気ままに、自由気ままに、ドゥルーズを！

主体化された筋力バカはやってばかりいる

ドゥルーズは『記号と事件』⁴のある箇所において、とある問題の核心に迫る。ドゥルーズはここでスポーツを問題として扱っている。正確には、スポーツを問題とすることによって、彼の哲学戦略のありようを敷衍していくのだが、しかしここでは、彼の哲学への態度は問題としない。それは体系的研鑽を積んだミーハーではないドゥルーズが正しくやるべきことである。ミーハーである私にはそんなまねはできっこないし、当座はミーハーであることの軽やかさを自らの最大の武器にして、進撃していく。ドゥルーズの議論を、吉田寮の見取り図へと仕立て上げること。これが前線に立つ私へと下された指令である。軽やかさはいつだって大きな武器なのだ。とは言え以下からは一旦、足取りを重くし、オカタイ議論へと沈潜する。

ドゥルーズによれば、スポーツの種類というは時代とともに変化してきている。一昔前では考えられなかったようなあり方を持つスポーツが、現代において登場してきたというのだ。両者のスポーツにおいては、各々に全く別の作動装置が働いている。ここでは一昔前まで支配的だったある種のスポーツを筋力スポーツ、現代において軽やかに（！）登場してきたスポーツを波スポーツと便宜的に呼ぶことにする。

一昔前では、スポーツとは筋力によって左右されるものであり、筋力が内に含みもつエネルギーの量的な多寡がスポーツマンの運動を決定付け、その筋力＝エネルギーこそがスポーツという枠組みを支えていた。またもう一点重要なことには、このスポーツにおいて筋力は、スポーツをする主体（選手）の内にしかその源泉はなく、主体＝選手はおのれの筋力の上に自立的に、確固とした不動性をもって屹立していた。

運動は、スポーツや生活習慣のレベルで、明らかに変わろうとしています。私たちは長いあいだエネルギー論的な運動観をよりどころにして生きてきました。つまり、支点があるとか、自分こそが運動の源泉であるといった考え方をしてきたわけです。スプリントや砲丸投げなどは、筋力と持久力の問題だし、そこにはどうしても支点やてこが関係してくる。(p.243)

ドゥルーズが述べるように、典型例は陸上競技である。

陸上競技においては筋力なくしては何も始まらない。ポルトはその強大な太ももをバネに北京を跳ねたのであり、ヌデレバはその強靱なふくらはぎをポンプに黙々とレースを駆け抜けた。だから、無粋な言い方ではあるが、ポルトにあの太ももが、ヌデレバにあのふくらはぎがなかったならば、彼らは勝者にはなれな

かったであろう。しかしここで、疑念が生じる。筋力の存在がスポーツにとって決定的に重要であるのは確かだが（筋力の多寡が勝敗を決定付ける）、筋力の存在（ボルトにとっての太もも、ヌデレバにとってのふくらはぎ）それ自体が、それだけで筋力スポーツのすべてなのだろうか。もったいぶった言い方であるが、この疑念の提出者は無粋な私に対して直裁に、以下のように問うている。「あなたはボルトにあの太ももがなかったならば勝つことはできなかったというが、それでは、ボルトはあの太ももを持っていたという、ただそのことのみが、彼の勝因だったというのか」と。この指摘に対するドゥルーズの議論を見てみよう。

ドゥルーズによれば、筋力スポーツ選手は「自分こそが運動の源泉である」と考えている。つまり、選手は自らのうちに、「運動の源泉」たる筋力を見いだすのだ。そして選手は、「私は筋力を持っている」という自己知の獲得という過程を経て後、走り出すことになる。つまり上の疑念の指摘とおりに、筋力の存在が確立されるだけでは、筋力スポーツの勃興はあり得なかったということだ。必要とされるのは自己知を持つに至った選手、すなわち、主体となった選手の登場である。次のように定式化できよう。選手＝主体は、おのれのうちに確固として存在する筋力について知り、おのれの筋力を基盤に、それを自らの身体を躍動させる作動装置たる「支点やてこ」にして、そこから跳梁していくのである、と。ボルトを見るがよい。おのれのうちに宿る底知れぬ筋力の存在を知り、トラックを躍動する、あの姿を。あれを主体と言わずして何と言う。人々の視線に反応し、新奇なパフォーマンスを出し惜しみすることなく繰り広げる、あの主体を⁵。

以上の議論を簡単にまとめる。筋力スポーツにおいては筋力が問題である。しかし筋力だけがあれば事足りるというわけではなく、筋力をおのが物として自己の内に認識する者の存在が、筋力スポーツには不可欠である。この者は選手となり、主体となり、トラックへと駆け出していく。そしてこの主体は、自己の運動の基盤たる筋力が自己のうちに尽くあるのを知っているから、自信に満ちあふれている。また主体とは、その言葉の含意からして、何かをなすものである。主体は何かをなすにあたり、自身のうちに見出される、まったき私的所有物としての筋力を用いる。一個の自立した主体、能動的にことをなす主体、私的財産を内に閉じ込める主体、これらが筋力スポーツにおける主体である。このような主体のあり方を筋力＝主体と呼ぶことにしよう。

ナンバ野郎はノッてばかりいる

次に、現代において登場した新たなスポーツの類型である、波スポーツを見ていく。筋力スポーツにおいて重要であった、筋力の存在をおのがうちに自覚した主体＝選手は、ここでは活躍の場を見いだすことはできないだろう。重要となるのは、筋力を行使することではなく、波にのることである。

新しいスポーツ（波乗り、ウィンドサーフィン、ハンググライダーなど）は、すべて、もともとあった波に同化していくタイプのスポーツです。出発点としての起源はすたれ、いかにして軌道に乗るかということが問題になってくるのです。高波や上昇気流の柱が織りなす運動に自分を同化させるにはどうしたらいいか、筋力の起源となるのではなく、「ただなかに達する」にはどうしたらいいか。問題の核心はそこにあるのです。（p.244）

波スポーツをやるにあたって求められるのは、筋力ではない。求められるのは、そこかしこに生起する波（サーフィンであれば海の波、ハンググライダーであれば大気の波）にノッてしまうことである。筋力スポーツにあつては、参加資格は「筋力を擁すること」に制限されていた。だから、極端な話、足を持たないものは陸上競技には参加できないし、あるいは義肢を付けるなどして他所から筋力を調達してこなければいけない。参加資格は一部のものに限られているわけだ。それとは対照的に、波スポーツにあつては、参加者＝波乗りは自らのうちに運動を起こすための力を持っている必要はない。なぜなら運動を起こす力は波のなかにすでに存在しているからだ。したがって、波乗りたちは波にノッて波の力を活用すれば運動を起こすことができるし、その限りで波スポーツには参加制限などない。足がなくて波にノるまでの初動を起こせないというならば、誰か他のものの手や足を借りて、波のなかに到達するまでの手助けをしてもらえばいい。あるいは、波のなかに放り投げてもらえばいい。あとは、風の気が向くがまま、どこいくものか、波に身を委ね、その運動を楽しめばいい。

また、波スポーツをやるにあたって、波乗りには選手＝主体となることも求められてはいない。より分かりやすく言うならば、主体的に振る舞う必要なんてないということ。やはりここでも同じ言葉を繰り返す

が、そこかしこに生起する波にノることだけが重要なのである。陸上競技のトラックの上では、選手たちは何かを成そうという決意を胸に、真剣ながらもどこか悲壮感の漂う表情を浮かべている。そんな険しい表情を浮かべ、砂浜にて佇む波乗りたちを見たことがあるだろうか。ナンパな波乗りがそんな風に佇むなんて、滑稽というものであろう。いかに楽しく波にノるか、波にノっていかに気持ちよくなるか、すなわち、いかに波と「同化」するのかということしか、ナンパな波乗りの頭にはないのだ。そんな彼らに悲壮感漂う主体性など必要とはならない。むしろ、目の前にある波に自らを同化させる、もしくは波に自らがさらわれることこそが波乗りに求められているからには、主体性の喪失こそが問題となる。主体性などという重しを突けていては海に沈んでしまふし、空高く風によって運ばれていくこともできない。

やるんじゃなくて、ノっちゃおうぜ

以上、ドゥルーズのほんの僅かの言葉を手がかりに好き勝手にモノを言ってきた。そこでは二つのタイプのスポーツが取り上げられたわけだが、私は後者のタイプにおける波乗りたちこそが、この吉田寮においては決定的に重要であると考えている。私はあなたに対して「ナンパな波乗りたれ」と言いたいのである。

いったん話は逸れるが、よく世間では「誰それが何々をしている」といった類の言説、あるいはそこから派生して「だから誰それは良い／悪い」、具体的には「誰それは大企業に勤めている、だから偉い」「誰それはいつまでもプー太郎をやつてる、だから駄目」といった言説が聞かれることがある。世間では、主体的で、責任感があり、道徳を備えた「善良な市民」が偉く、そうではない者は駄目だと評価される。つまり「善良な市民」であることが、世間という名の筋力スポーツへの参加資格である。そこでは筋力という名の責任感、道徳感を備えた主体が力強く飛び跳ねている。そんな筋力も持たずに、しかしそれでも粘り強く生きている者を世間は見ようとはしない。世間は圧倒的に筋力バカたちによって営まれており、そんなバカ共は「やるかやらぬか、それが問題である」と凄んでみせる。それじゃ息苦しい、と思う。何かを気負って事を成すなんて重苦しいことはしたくない、と思う。規則があるのだろう、マナーがあるのだろう、だけど、もっと軽やかに生きたい、と思う。主体的になんて振る舞いたくないんだ。責任感を持つことを強制されたくないんだ。お行儀の良い道徳の中で涙を流したくないんだ。話を戻そう。吉田寮はそんな世間とは一線を画する場である。つまり、「吉田寮は稀有な場所である」。

世間という場が主体たちによって構成されており、そこでは一つ一つの点が散在しているが、それに反して、吉田寮は波乗りたちによって構成され、そこでは多種多様な線が交錯している。吉田寮とはいくつもの波＝流れが生起する場なのである。ここに住む人々が織りなす人の波が、ある流れを形作ってそこかしこで生起している。それは何だっていい。人々のお喋り、受付での飲み会、食堂でのライブ、あるいは自治活動。そこかしこで、楽しく陽気でいてちよびり苦かったりもする流れが、人々の情念をかき乱している。あなたはナンパな波乗りになってこの流れにノってしまえば良いと、私は言うのだ。

海の波、大気の波、すなわち、水の流れ、風の流れを見れば分かるように、それらは「もとからあった」ものである。誰がその波を起すともなく、一つの波の生起が他の波の生起を呼び、一つの流れが他の流れを生み出す。「やるかやらぬか」を問題にすると、一つの主体が屹立し、この連続的な流れは遮断されてしまう。だから「もとからあった」連続的な流れ、波に「ノるかノらぬか」を問題にしなればいけない。いや、これでは波にノる前の態度があくまで問題とされている。主体、態度、気負い、気概、責任、そんなものはすべて吹っ飛ばしてやりたいのだ。だから、ナンパな波乗りたちにはこう問うことにしよう、「ヘイ、ユー、ちゃんとノっちゃってるかい？」そして、波乗りたちからはこう返答がくることを大真面目に期待しよう。「HaHaー!ノリノリだYO! ユーはそこでナニしてる?ノっちゃいなYO!」ノっちゃってるか、ノっちゃっていないか、それが問題なのだ。

さいごに

先に私は、吉田寮は世間とは一線を画した場であると述べた。しかし、そんな吉田寮でも「やるかやらぬか、それが問題だ」と言う筋力バカはいるし、参加者に主体性が要求されることはままあることだ。少なくとも私にはそう感じるものがあつたし、それによってちよつと悲しい気持ちになったこともある。だが、そんなことはどうでもいい。波のうねりはバカ共を簡単にさらってしまえるほどの力を持っている。だから、

私はこんなにも長々と書き連ねてきたわけだが、よーするに、こんな文章を最後まで読んでしまうというノリノリなあなたに言いたいことは、吉田寮に関わって、そこで流れにもみくちゃにされながらさらにノリノリになって、いつか風が止むまでは真剣に遊んで、そして風が止んだら地面に叩き付けられることになるだろうから、その時は痛い思いをして、悩みに苦しんで、まあ、よーするにだ、心身を擦り切らして遊んだらいいじゃん、てことである。

あなたは問われてなどいない。ノッてノッてノリまくればそれでいい。だがしかし、ノッてノッてノリまくるには、主体性などといった重苦しいものは脱ぎ捨てなくてはいけない。軽やかにもいくつもの線を飛び越えていくための身軽さを、身に付けねばいけない。バカ共を笑い飛ばしてやるだけの晴朗さも要求される。数々の流れに触発されるに足るだけの精神の柔軟さも必要となる。流れに身を委ねることは、世間の「善良な市民」にとっては恐怖体験である。そんな恐怖体験の最中に身を投げ、「HaHaー!ノリノリだYO!」と叫ぶことは、もちろん「善良な市民」であっては望むべくもない。そう、あなたは問われてもいるのだ。

注

1 一応説明しておこう。順に、私の「立ち位置」の1)「特権性」、2)「秘匿性」、3)「閉鎖性」について説明する。

- 1) 私があなた（つまりはこの文章を読む人々。私は勝手に吉田寮入寮を考えている人々を想定している。）にこの文句を述べる時、吉田寮に対する親しみのある評価という類の言説を述べる「権」能は私にのみ特化されているという事態。あなたは「はあ」と受動的に頷くほかない。
- 2) したがって権能が私という一方の側の手にしかない以上、私の言説はあなたに対してある種の神秘性を呈示するという事態。あなたの「はあ」という呟きには、困惑の念が含まれている。
- 3) したがって私の言説が神秘的なものである以上、それはあなたに対して届き得るものではなく、まさにサークル状（これを大学内におけるある種の人々のサークル活動に当てはめてみせていい。）円環運動をなすという事態。ここにきてあなたの「はあ」には呆れの念が含まれるに至る。このような暴力的とも言ってもよい事態が生じているからこそ、私はすぐ後に「眼をつぶって」くれとも言うわけである。

2 注1にあるように、私は吉田寮入寮を考えている人々を想定している。

3 Gilles Deleuze (1925-1995)。「ドゥルーズってナニモン？それを知りたきゃこれを読み、そして喜びと悲しみにうち震えるがいい。」と私は言うことにしている。小泉義之『ドゥルーズの哲学 生命・自然・未来のために』講談社現代新書、2000

4 ジル・ドゥルーズ『記号と事件』、宮林寛訳、河出文庫、2007。原題は《Pourparlers》

5 ボルトが北京五輪100メートル決勝を手を翼のように広げながらゴールしたシーンには、私も一瞬間だけではあるが、心を奪われてしまった。だが、その後、ライジング何とかというパフォーマンスをしたり、ただただ主体の枠内で喜びを爆発させる彼の姿には、正直幻滅させられたのを覚えている。あの場で、小泉義之が言うような「高い政治性と身体性が結びついた強度のパフォーマンス」をやったの欲しかった。オリンピックという下衆な空間のなかで、下衆どもの集う空間に風穴をあける、そんな力業が欲しかった。そんな期待をあを躍動する翼に見いだしたのだが、

6 「私的所有物」という用語はここで初めて出てきたが、筋力のこの新たな規定は、これまでの議論から難く導出されうる。筋力スポーツの世界とは、基本的には勝負の世界である。筋力を持つ主体同士は、互いにその勝敗を賭けて争う。勝敗を決定付けるための最重要因子は、各主体が内に持つ筋力の多寡であるからには、主体はそれぞれの筋力を自らのうちに留めておかざるを得ない。主体間においては、闘いこそあれ、筋力の相互譲渡はないのである（スポーツの醍醐味はひょっとするとこの点にあるのかもしれない）。ここに私的所有物としての筋力という規定が、新たに付け加わるに至る。